



「OSAKAなんみんハウス」のオープンに向け、玄関や部屋を改修する支援者たち＝大阪市淀川区

難民認定支援 市民もタッグ

団体、大阪にあす拠点開設

名称は「OSAKAなんみんハウス」。地下鉄御堂筋線東三国駅から徒歩5分ほど。昔ながらの町なかにある、築約50年の住宅だ。難民支援団体「在日難民との共生ネットワーク」（通称・ラフィック）が設置し、運営にあたる。住宅の所有者の女性（57）は昨年、中東から欧州に向かう大勢の難民が国境で足止めされているニュースをテレビで見た。日常を奪われたその姿に、いたたまれない気持ちになった。日本にも野宿する難民申請者がいることも分かった。

一方で、欧州の一般市民が、疲れている難民に食べ物や配っているシーンにも心を動かされた。「自分にも何かできることはないだろうか」。ネットで難民支援の団体を検索し、ラフィックを見つけ、連絡した。「雨風をしのぐために、必要としている人がいれば空き家を無償でお貸ししたい」。今後は食器や家具など使わない品を集めて寄付することを考えている。ラフィック共同代表の田中恵子さん（62）は「本当にありがたい申し出。不安な思いを抱えている人たちが、悩みを相談したりくつろいだりできる居場所になりたい」という。そして、いずれは各国の料理を振る舞い、地域の人も集えるサロンのような空間を目指したいと思いつけている。

ラフィックは、地元の町内会にも加入する。井有一（いっしゅ）南新興町会の助照雄会長によると、地域は高齢化が進み、一人暮らしの人も多い。「最初はお互い戸惑い

もあるかもしれないが、接する中で打ち解けていく」と話す。ハウスは1階はラフィックが事務所を置き、難民認定に関する問い合わせに応じたり、生活支援をしたりする。2階は住む場所に困った難民申請者たちのシェアハウスに使う。書棚を設け、日本語の教材や出身国の言語の本・DVDもそろえる。各地の難民支援の団体によると、難民申請者にこのような総合的なサポートを提供する施設は、全国的にも珍しいという。ラフィックは2002年に設立。いまは、紛争や迫

害などでアフガニスタンやガーナ、エジプトから逃れて来た約40人と関わっている。これまでは、大阪府高槻市にある貸事務所で活動してきたが、手狭なため十分な対応がしづらかった。難民申請した人たちは半年間は就労できず、生活に困っている場合が少なくない。ラフィックから食料の支援を受けている北アフリカ出身の50代男性は、なんみんハウスについて、「心強い。難民認定の手続きなどをサポートしてもらえ

ニュース見て、建物を無償提供

日本で難民認定を求める人たちを支える拠点が来月1日、大阪市内にできる。紛争などで母国を追われた難民の映像に心を痛めた市民が建物が無償提供し、支援団体が開設にこぎつけた。海を越えて逃れてきた人たちが身を寄せられる場にするともに、地域住民との交流の場を目指す。

日本の難民認定
法務省によると、日本で今年1～6月に難民認定を申請した外国人は5011人（速報値）。過去最多だった昨年1年間の7586人を上回って年1万人に迫るペースという。同じ1～6月に難民と認定された人は4人。このほか、33人が人道的な配慮で在留を認められた。審査には、平均で1年近くかかる。

生活もサポート

あすから見学会

10月1、2日に、「OSAKAなんみんハウス」の見学会がある。1日は午後3～8時、2日は午後1～5時。予約は不要で誰でも参加可。各国の飲み物が楽しめる。難民に関する写真展示やDVDの上映もある。問い合わせはラフィック（rafiquomodati@yahoo.co.jp）へ。（北村有樹子）

